

# 姜兌琬君学位請求論文審査報告

## 一、本論文の構成

姜兌琬君より提出された博士学位請求論文「福沢諭吉の初期思想―近代的概念の受容と変容―」は、「初期」の福沢諭吉に焦点をあて、福沢が西洋からいかなる近代的概念を受容し、その概念を変容させて日本社会に伝えようとしたかについて、分析した論文である。本論文の構成および目次は、以下の通りである。

## 序

### 第一章 人種観―S. A. ミッチェル問題

#### 一 はじめに

#### 二 福沢とミッチェル

##### (一) *School Geography* と *New School Geography*

##### (二) 初期福沢の問題意識とミッチェル

##### (三) ミッチェルの人間観

#### 1 宗教

## 2 人種観

### (四) 福沢の著作にあらわれるミッチェルの影響

## 三 福沢の継承と削除

### (一) 継承

### (二) 削除

### (三) まとめ

## 四 おわりに

## 第二章 人間観―権利、義務、労働

### 一 はじめに

### 二 『西洋事情』外編

#### (一) 『西洋事情』外編と『政治経済学』

#### (二) 政治的人間観と経済的人間観

#### (三) 権利と義務

##### 1 権利、そして文明社会の尺度としての自由

##### 2 義務としての経済的独立と遵法

##### 3 社会学の領域に編入した経済領域…私有

### (四) まとめ

## 三 『西洋事情』二編「巻之一」

### (一) 『イギリス法釈義』における権利と義務

#### 1 「人間の通義」

#### 2 権利と義務の相互性

(二) 「収税論」

(三) まとめ

四 労働問題・学問と労働

(一) 『政治経済学』と『学問のすゝめ』においての

労働

1 労働認識

2 単純労働と知的労働

3 スキル獲得

(二) まとめ

五 おわりに

第三章 中産層育成構想

一 はじめに

二 福沢の中産層育成構想

三 中産層への着目過程

(一) 『西洋事情』にあらわれる「中人」、「中等」

(二) 自身の経験

四 福沢の中産層構想の特徴

(一) 中産層と「学者」

(二) 「富」と「学問」と「慶應義塾」

(三) 中産層育成活動

五 おわりに

第四章 自由民権運動と初期思想——『学者安心論』を中

心に

一 はじめに

二 福沢の自由民権運動評価

(一) 賛成と反対

(二) 『学者安心論』

1 福沢の民権と「政」

2 民権論者への批判

3 政治的意味としての民権意識

(三) 福沢の立場

三 初期思想との関係

(一) 内在的改革意識

(二) 漸進的秩序維持

(三) 幕臣活動

四 おわりに

第五章 西洋思想受容の方法論——「分限」

一 はじめに

二 方法論としての「分限」

(一) 翻訳語「分限」

(二) 「分限」概念の展開

(三) 「分限」の方法論…事例

- 1 自由
  - 2 礼儀
  - 3 人間性—貪吝、奢侈、誹謗
  - 4 文明段階論
  - 5 親孝行
- (四) 「分限」の方法論
- 三 思想としての「分限」
- (一) 「分限」と明治維新
- (二) 「分限」のオリジナリティー
- 四 おわりに
- あとがき
- 参考文献一覧

## 二、本論文の概要

本論文において姜君は、「文明開化」のために「奮闘」した福沢諭吉について、これまで主に検討されてきた「自由」「独立」「著作権」や「女性観」などとは異なる概念、すなわち、「人種」「労働」「中産層」「権利」「義務」「民権」「分限」といった概念について、その受容と変容過程を分析しようと試みている。姜君は、福沢が最も意欲的に西洋文物に接し、こうした近代的概念の受容と変

容作業に取り組んだのは幕末から明治初期であるとして、福沢の「初期」思想に焦点をあてているが、この「初期」とは、一八六〇年代後半から一八七〇年代までであるとしている。これは、福沢自身が「コンモン、エデュケーション」と呼んだ、英米の辞書や百科事典、教科書といった一般教育書に親しみ、これを翻訳翻案した時期と、ほぼ符合している。福沢は一八七四年二月二十三日の荘田平五郎宛書簡において、もはや翻訳は止め、今年は読書勉強していくつもりだと述べ、この頃から、J・S・ミルやスペイン、ギゾー、バッケル、バジヨット、トクヴィル、といった西洋思想家の専門的な大著に挑んでいくことになるが、これより前の福沢が、主な分析の対象となっている。これが、本論文の大きな特徴である。

以下において、本論文の概要を述べておきたい。

第一章では、初期の福沢が西洋の著作から受容した概念のうち、「人種」に着目し、その受容過程と、これを日本社会に導入する際に試みた変容の過程について分析している。具体的に取り上げるのは、幕末期に福沢が最も強い影響を受けた地理学者、サミュエル・A・ミッチェルの *School Geography* と *New School Geography* と福沢との関係である。当該期の福沢は、西洋思想から自らの思想を

構築することより、西洋の「一般的」な事情を伝えることに主眼を置いており、未だ十分に認知されていない西洋について詳細な情報提供を試みる。そのなかで、ミッチェルの著作は『西洋事情』初編から『訓蒙窮理図解』、『掌中万国一覽』、『世界国尽』、など初期著作のほとんどすべてに引用されている。ミッチェルの著作には、全体的に強い宗教性、キリスト教色があらわれており、神による天地創造が大前提とされ、キリスト教の優位性が説かれ、それが国家や人種の優劣、格付けにも反映されていた。福沢は『掌中万国一覽』において、ミッチェルの人種論を全訳して掲載し、『世界国尽』もミッチェルの強い影響を受けた。福沢はミッチェルの階級的、非平等的人種観を継承したが、西洋諸国では階級はすでに除かれていと述べている。それは、キリスト教に基づく平等観と、西洋諸国への積極的支持によるものであった。一方で、福沢はミッチェルを引用する際、「日本」についての記述を意図的に削除している。その理由は、日本人が蒙昧な「半開」状態にあるといったミッチェルの評価が、当時の福沢にとって受け入れがたいものだったからである。こうした西洋諸国に対する日本の劣位がキリスト教によって固定化してしまうのが、ミッチェルの描く世界観であり、それ自体、福沢は許容す

ることができなかった。

第二章では、福沢の受容した「権利」、「義務」、および「労働」概念について、『西洋事情』外編と二編を主な事例として、分析を試みている。『西洋事情』外編は基本的にジョン・ヒル・バートンの『政治経済学』の翻訳であるが、政治とは無縁であった明治元年当時の福沢は、経済活動を基準とした功利的な観点から人間像の考察を行った。人間は、社会で生きていくために必要な能力を持って生まれて、自分の幸福のために能動的に活動していく存在とされ、こうした働きを可能にするために必要な道具として、自由が位置付けられる。この自由は、法律によって保障されるべき権利であると同時に、文明国においては法律によって制限されるべきものであった。一方、権利を享受することによって発生する人間の義務は、法律の遵守と、他者からの経済的独立にあるとされる。また、福沢は人間の権利として財産の私有を重視し、これを、社会を構成する原理としていた。その私有の具体例として挙げられるのが、学者としての福沢に深く関わる特許と著作権であり、こうした知的労働の成果を人間の権利として位置付けている。『西洋事情』二編では、ウィリアム・ブラックストーンの『イギリス法釈義』とフランシス・ウェーランドの「収税論」を

引用し、前者の「人間の権利」における「個人の絶対権」を翻訳・掲載した。福沢は、権利は絶対的な価値を持つとしつつ、個人が社会に害悪を与える場合、法的制約を受けるとする。その権利は、生存権、住居権、財産権に分類され、こうした権利と義務との相互性が強調される。すなわち、ある人の権利は、ほかの誰かの義務である、という理解であった。「収税論」からは、納税という国民の義務とともに、収税の主体である政府が税金を用いて果たすべき義務が論じられている。ここでも、権利と義務の相互性が意識されていた。さらに、役に立つ労働を重視する労働認識や単純労働と知的労働といった労働の区分、頭を使つてスキルを磨くこと、といったバートンの労働観は、福沢の実学を重視する学問認識、「心を用ひ」る仕事と「力役」の区別、技術的かつ知的能力的側面をあわせもった学問観に反映されている。

第三章では、『学問のすゝめ』五編で福沢が展開した中産層育成構想について、分析されている。福沢は中産層を「ミッツルカラッス」と呼び、中央政府と人民との関係が再編成される中で生み出された、新たな社会構造構想として位置付けた。福沢は中産層を国の文明を進める存在とし、「国の執政」でも「力役の小民」でもない、「国人の中等」

に位置するものと唱え、その養成の必要性を説いた。『文明論之概略』でも、「中等の人民」の重要性を強調しているが、福沢はすでに、『西洋事情』初編および外編において、「中人」や「中等」といった用語で、西洋の中産階級について表現していた。『学問のすゝめ』で中産層の代表例として挙げられている「ワット」と「ステフェンソン」についても、すでに『西洋事情』外編で詳しく紹介し、社会を進歩させた発明者として位置付けている。これは『政治経済学』にはない内容であり、福沢がリプリーの百科事典から抜粋して翻訳したものであった。なお、『西洋事情』外編では「個人」として注目されていた発明家が、「国の独立と文明開化」を目指した当時の『学問のすゝめ』では、「集団」としてその重要性が認識されるようになっていた。そこには、幕臣という立場から経済的に独立して翻訳著述家として自立してきた福沢自身の活動の遍歴も、濃厚に反映されていた。福沢にとっての中産層は、「学者」、とりわけ「慶應義塾」と深く結びついた概念であり、その役割は国全体の気風を一新して独立のための文明化精神を普及することに置かれている。富と学問とを追求する役割を中産層に求めつつ、その具体像を慶應義塾出身の学者に限定して描いたことは、富の創出と知の探求との乖離を生んだ。

福沢自身、慶應義塾出身者が商工業活動を行うことの難しさに直面し、その乖離を埋めるべく、門下生に「勇力」を求めることとなる。また、中産層構想を実現すべく、福沢は華族層による学校設立を奨励していく。

第四章では、自由民権運動の発祥期における福沢の民権観を分析し、それが初期思想といかに関わるかが検討されている。具体的な検討対象となるのは、民権運動草創期に発表され、「民権」概念を理論的・思想的に探究した『学者安心論』である。草創期の民権運動に対して、福沢は民選議院設立を援護しつつ、議会設立後の権力運用には懐疑的であるなど、複合的な評価を示した。『学者安心論』では、人民の国政への参加という意味で民権論に賛成しつつ、その趣旨は政権への直接参加を意味するものではなく、人民としての社会活動を活性化させて「間接に其政に参与する」ものだとしている。当時の民権論者に対しては、政権奪取ばかり考えているとして批判的評価を下した。福沢において、「民権」と「民権論者」は明確に区別されるものであった。福沢が描いていた英国型の議院内閣制と、民権論者の唱えるフランス式の直接民主主義モデルは、人民の直接政治参加をどれほど反映させるかといった違いがあるだけでなく、抵抗権の承認においても、両者の立場は相違

していた。福沢は幕末期において、すでに洋学による人材の養成、それによる富国強兵の実現といった構想を描いており、民権運動の発祥以前から、人民が「客分」とならず、国家に対する責任感を持つべきであると提唱していた。福沢の民権意識は、こうした問題意識から生まれてきたものであった。英国の議会制度についても、すでに幕末の段階で高い評価を与え、フランスの共和政治を君主独裁よりも酷い制度だと評している。体制の急進的な変革を嫌う福沢の態度は、幕臣として第二次長州征伐を積極的に後押しし、幕府中心の秩序維持を追求した体験からも、裏付けられる。

第五章では、福沢の西洋思想受容における特徴的な方法論として、「分限」を取り上げる。福沢は西洋思想を日本社会に紹介し、それを基盤として自身の思想を展開していったが、その際に重要視した概念のひとつが「分限」であった。福沢はこれを、学問をする際に最も重要な概念であるとさえ述べている。幕末維新期の福沢は、bound regulation、extentの翻訳語として「分限」を用いているが、それにとどまらず、人が自由ばかり唱えて「分限」を知らないといが儘放題になり、他人を妨げる、学問においても「分限」をわきまえないと奢侈や乱暴、粗慢に陥る、などと述べている。福沢は西洋の著作の内容をそのまま翻

訳して伝えるだけではなく、その概念が誤解を生まないようにする「装置」として「分限」を用いていた。「分限」を知らなければ「礼儀」も度を過ぎて見苦しいものとなり、親が過剰に子どもに「孝行」を強いることにもなる。急進的な社会変革が行われた明治維新期だからこそ、福沢は「分限」という自己制御的精神を強調したのである。西周はミルの功利主義を紹介するにあたって「公益」の重要性を説き、中村正直も『西国立志編』において、「克己」「節儉」「修身」などの徳目を重視したが、福沢においては、特定の思想家ではなく、幅広い洋書のなかから「分限」という一般原理を析出し、それを様々な事例に適用したところが特徴的であった。

### 三、本論文の評価

従来、「初期」の福沢思想についての分析を試みる際、主に採られてきたアプローチは、当該期に福沢が読んだ西洋の書物の内容、およびその起源を探究する、というものであった。本論文ともっとも近接する研究であるアルバート・M・クレイグの『文明と啓蒙―初期福沢論吉の思想』も、スコットランド啓蒙思想やアメリカの地理書、ジョン・ヒル・バートンの『政治経済学』の分析に多くの紙幅

を割いている。こうしたアプローチの背景には、クレイグの言葉を借りれば、「福沢は卓越した訳者であった」と、「初期」福沢を優れた翻訳者と位置付ける傾向があった。福沢の翻訳がきわめて優れていたがゆえに、福沢のテキストそのものの分析というより、福沢が「何」を訳したのか、その起源はどこにあるのか、といった、西洋の原典の検証に、比重が置かれてきたといえよう。「初期」の福沢は、書簡や原稿、手沢本などの資料がほとんど残されておらず、一八七〇年代以降、現実問題に対する処方箋を示していた時期の福沢に比して、その思维構造をあきらかにするのがきわめて困難であることも、こうしたアプローチの背景にあった。

本論文の評価すべき第一の点は、これまで多くの研究者が正面から検証することを避けてきた「初期」の福沢に果敢に挑戦し、当時福沢が読んだ地理書や教科書、百科事典などを丁寧に読み解き、福沢の文章と根気強く対照させて翻訳過程を丹念に検証していることである。「卓越」した訳者であった福沢が、しかし「忠実」な訳者であったかどうか、について慎重に吟味し、福沢が西洋の近代的概念をそのまま受容したのか、あるいは、日本社会の実情にあわせて変容させて受け入れていったのか、その過程を詳細に



分析し、あきらかにしている。西洋のキリスト教中心の人類観、地理観を受け入れつつも、未開とされた日本については、受容を拒否したことについて、その要因を詳しく分析した点などは、その一例である。

第二に、これまで一八七〇年代になって注目されたとされてきた概念、たとえば中産層構想についても、その原点はすでに幕末の著作にあらわれており、文明化を目指す際に突如として思い立ったものではなく、幕末に百科事典から受容していた概念を変容させ、新たな時代に展開していったことをあきらかにした点も、高く評価されるべきであろう。福沢が幕末期に形成した思想の重要性を明確にした点は、学界に対する大きな貢献である。

第三に、上記の点を実証するにあたり、実に緻密かつ綿密に福沢の著作と西洋の原典とを読み込み、その共通点と相違点を析出している。著作執筆当時に福沢が置かれていた政治的・社会的立場や、西洋の原典が読まれていた範囲、影響力、西洋政治思想史における位置付けなどを十分に考慮に入れた上、福沢がなぜ、また、いかにして西洋の概念を受容し、自らの政治的態度を決めていったのか、その理由と過程をあきらかにした点が、評価される。福沢が自由民権運動に一定の距離を置いた要因として、かつて幕臣と

して社会の急進的変革を嫌った経験や、フランス革命後の混乱収束を目指す西洋の自由主義的思想に触れたことなどを示している点などは、よい例であろう。

第四に、福沢が日本における自由や平等、独立の概念の導入にあたって先駆的な役割を果たしたことは周知の通りであるが、その福沢が繰り返した「分限」という概念を提唱し、自由が我が儘放題に陥る危険性を提唱していたことなどをあきらかにした点である。自由にとどまらず、学問や礼儀、親孝行など、様々な分野で、「分限」を知ることの重要性を福沢は唱え、過剰な自己主張の弊害を論じたが、こうした福沢の自己節制精神については、これまでほとんど検討されることがなく、西洋概念の受容者としての福沢の役割を考える上で、きわめて重要な貢献であるといえる。こうした評価される点がある一方で、本論文にもいくつかの課題が残されている。

第一に、これまで未開拓であった「初期」福沢の思想を検討し、権利、義務、中産層、自由民権運動観や分限など、思想家としての原初的基盤を浮き彫りにしたことに本論文の意義があるが、それだけに、この基盤がその後の福沢の思想とどのように連関し、展開されていくのか、その見通しが示されるならば、福沢研究としてさらなる意義を生み



出すことができた。たとえば、文明段階論は、すでにミツチエルから継承していたが、幕末期においては「半開」国としての日本という位置付けを受け入れることができず、引用の際に削除していた。それが、約十年後の『文明論之概略』においては前面に押し出され、日本の文明開化の必要性を説く要因とされていく。こうした変化について姜君は、注意深く言及はしているものの、それがミルやギゾーなどの読書によるものなのか、あるいは、時代背景や社会環境の変化によるものなのか、明確な説明がされてはいない。あくまで「初期」に焦点をあてた研究であるので致し方ないが、見通し程度は示してほしいところであった。

第二に、福沢が身を置いていた知的空間について、特に明治初期以降においては、やや分析が甘い点も気になるところである。幕末期は、西洋事情を紹介する先駆者として、自他共に認める存在であった福沢だが、明治以降、多くの洋学者が活躍し、西洋の概念は様々なルートから移入され、明六社や東京学士会院、慶應義塾をはじめ、さまざまな環境のなかに、福沢は身を置いた。例えば、福沢がミルを読んだきっかけは、慶應義塾における一種のミル・ブームにあったとされており、ミルは学者や自由民権家の間で熱心に読まれた。こうした明治初期の知的空間は、福沢の思想

形成にどの程度影響を与えたのであろうか。この点も、より慎重に考慮すべきであったと思われる。

第三の課題として、福沢の幕末期における幕臣としての体験や、洋行経験、また読書遍歴などの影響は綿密に考察されているが、福沢における蘭学の影響、さらには儒学や朱子学の影響は、本論文においてほとんど射程に入っていない。福沢自身、蘭学から英学に転向してきたことはいくまでもないが、生涯にわたって蘭学の先学に対し敬意を示しており、蘭学修行が明治期以降の著作に一定の影響を与えたことも指摘されている。また、儒者や儒教を嫌悪した福沢ではあるが、近年、複数の研究者によって、儒教や朱子学をはじめとする江戸思想の影響を受けていたとの問題提起がなされている。福沢の「分限」を巡る議論を検討する上でも、近世期の儒学を背景とした「分」の観念を福沢がどのように捉え直したのか、といった点はさらに深く考慮されるべきであったし、「初期」に着目するのであれば、福沢の少年期から青年期にかけての知的経験について、より慎重に検討してほしかった。

第四に、本論文の各章はそれ自体で完成度が高いものの、各章がどのように有機的に連関しているのか、さらに検討を深めてほしいところであった。例えば、第一章で言及さ

れている、『西洋事情』外編にみられる福沢の「天」の観念は、ジョン・ヒル・バートンの『政治経済学』に依拠するものであり、そうしたバートンの宗教観は、第二章で扱われる「義務としての経済的自立」や「人間交際」を巡る『西洋事情』の議論と深い結びつきを持っている。福沢が説く「天」「通義」「職分」「人間交際」といった観念は、原著者であるバートンのなかでどのようにに関連していたのか。そして福沢は、翻訳を通じてそれをどう捉え直し、再構成したのか。こうした分析をさらに深めてほしいところであった。

以上のような課題を残しているとはいえ、これは本論文の欠陥というよりは、福沢研究全体が抱えている知的課題であり、姜君が今後研鑽を重ねることで学界を牽引し、克服していくことができるものと判断される。本論文が、福沢論吉の初期思想の形成と展開の過程をあきらかにした功績は極めて大きく、その価値をいささかも損なうものではない。よって審査員一同は一致して、姜兌琬君に博士（法学）（慶應義塾大学）の学位を授与するのが適当と判断し、この旨を法学研究科委員会に報告するものである。

二〇二〇年八月二十五日

主査	慶應義塾大学法学部教授 法学研究科委員・博士（法学）	小川原正道
副査	慶應義塾大学法学部教授 法学研究科委員・法学博士	玉井 清
副査	慶應義塾大学法学部教授 法学研究科委員・博士（政治学）	大久保健晴